

# St. Luke's International University Repository

## 開学満20周年記念特別寄稿 聖路加看護大学卒業生 動態調査(第一報):就業状況および職業意識を中心と して

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2007-12-26 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 吉田, 時子, 岩井, 郁子, 伊奈, 侑子, 太田, 喜久子, 押尾, 祥子, 堀内, 成子 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10285/153">http://hdl.handle.net/10285/153</a>

This work is licensed under a Creative Commons  
Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0  
International License.



# 聖路加看護大学卒業生動態調査（第1報）

——就業状況および職業意識を中心にして——

聖路加看護大学  
開学満20周年記念事業  
企画委員会

吉田時子  
岩井郁子  
伊奈侑子  
太田喜久子  
押尾祥子  
堀内成子

## I. はじめに

聖路加看護大学は、昭和39年1月25日に4年制大学としての認可を受け、本年度（昭和59年）をもって大学開学満20周年を迎えるに至った。私たちはこれを、20年に渡る大学における看護教育活動の成果を概観し、将来への展望を明らかにする良い機会であると考えた。これまで大学卒業生については卒業後の実態があまり明確にされていないので、大学卒業後、現在までの動態を把握し、併わせて大学教育活動に対する意見を知ることは、教育活動の成果の一端として、さらに今後の教育に重要な示唆を与えようと考え、本調査を行った。

## II. 目的

聖路加看護大学卒業生の、卒業後現在に至るまでの動態を明らかにする。

## III. 調査対象および方法

### 1. 対象

聖路加看護大学の第1回卒業年度である昭和43年3月から昭和59年3月までに卒業した者769人のすべてを対象とした。

### 2. 方法

調査用紙を作成し全対象に送付し、回答後に無記名で郵送により回収した。調査用紙の内容項目に関しては本学教員に対してプリテストを実施し、その内容を検討・精選した。調査項目は、背景・現在の職業と将

来の希望・異動状況・職業意識・その他の意見、の5大項目に分かれ、選択肢形式と自由記述形式の両方をとった。（調査用紙は別添資料参照）

回答内容は、コンピュータ分析用にコーディングし、データ処理には東京大学大型計算機センターHITACを使用し、分析のプログラムはSPSSを用いた。

### 3. 調査期間

昭和59年5月1日現在の状況について回答を求めた。調査用紙は59年4月27日に発送し、同年7月末日までに回収した。

表1 卒業年度別回答率

卒業年度 (昭和)	回答数 (人)	回答率 (%)
43 年	25	65.8
44	26	66.7
45	21	65.6
46	29	74.4
47	28	75.7
48	24	70.6
49	29	76.3
50	23	63.9
51	31	67.4
52	25	71.4
53	40	66.7
54	35	62.5
55	40	70.2
56	34	66.7
57	37	77.1
58	37	62.7
59	40	63.5
計	524	68.1

## IV. 結果および考察

回答数532で、回答率69.2%であった。そのうち有効なものは、524(68.1%)であった。卒業年度別回答率は表1のごとくである。

### 1. 背景

#### 1) 年齢

対象の年齢は、22歳から43歳まで分布し平均年齢は29.8歳であった。20歳代と30歳代がそれぞれ49.8%、48.2%、を占めていた。(表2)

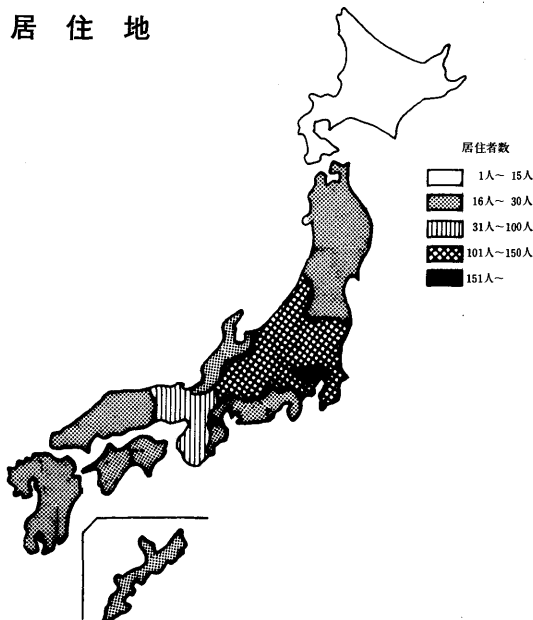
表2 対象の年齢分布

年齢階級 (歳)	人数	比率 (%)	
22~24	98	18.7	} 49.8
25~29	163	31.1	
30~34	148	28.2	} 48.2
35~39	105	20.0	
40~43	7	1.4	
不明	3	0.6	
計	524	100.0	

#### 2) 居住地

現在の居住地のうち最も多いのは東京都で、全体の37.1%を占め、次いで関東・中部地方が27.7%であった。外国居住者は15人(2.9%)で北海道居住者とはほぼ

### 居住地



同数であった(表3参照)。市群別にみると、東京都23区および10大都市に居住する者と、その他の市群町村に居住する者とはほぼ同率(50%)であった。

表3 居住地分布

居住地	人数	比率(%)
北海道	14	2.7
東北	20	3.8
関東・中部	145	27.7
東京都	194	37.1
北陸	28	5.4
東海	26	5.0
近畿	41	7.8
中国・四国	19	3.6
九州・沖縄	21	4.0
外国	15	2.9
不明	1	
計	524	100.0

#### 3) 免許取得状況

免許取得状況は、看護婦免許99.6%、保健婦免許99.0%、助産婦免許32.1%、高等学校教諭2級普通免許状(保健・看護)56.2%であった。

#### 4) 学位取得状況

学位取得状況では、修士号取得者20人(3.8%)、博士号取得者1人(0.2%)であった。これは学年平均52人の卒業生に対して約2人の割合で修士号取得者がいることになる。(なお在学中の者は含んでいない。)

#### 5) 婚姻状況

婚姻状況は、未婚者196人(37.4%)、既婚者325人(62.0%)であった。卒業年度別にみると卒後経過年数の増加とともに婚姻率は高くなり、昭和54年3月以前に卒業した学年では既婚者が各学年の65%以上を占めていた。また婚姻時の卒後経過年数の平均は3.2年であった。

#### 6) 子どもの保有率

既婚者のうち77.5%が子供を保有し、平均子ども保有数は1.9人であった。第1子出生時の卒後経過年数の平均は4.6年であった。

卒業時の平均年齢を22歳とすると、婚姻時の平均年齢が25.2歳、第1子出生時の平均年齢が26.6年となる。これを本邦における平均初婚年齢、妻25.3歳、および第1子出生時の平均年齢26.5歳<sup>1)</sup>と対比すると、本調査結果はほぼ全国平均に等しいと思われる。

## 2. 就業状況

現在(昭和59年5月1日)就業している者は、355人

(67.7%)であった。

### 1) 卒業年度別就業状況

卒業年度別にみると、卒業年度が新しいほど就業率は高率で90%前後であるが、昭和55年以前では50~60%を示す学年が多い。

本邦における婦人の就業の動向として、労働力率を年齢階級別にみると、15~19歳層では進学率の高まりを反映して低水準にあり、20~24歳層になると70.3%に達するが、25~29歳層では50.0%に低下し、30~34歳層を底に35歳以降徐々に上昇するというM字型カーブを描くといわれている<sup>2)</sup>。本調査において就業率が90%前後を示す卒業年の平均年齢分布は、22~25歳であり本邦と同傾向にあるが、35歳以降の就業率の上昇は本調査においては明らかではない。

ここで昭和47年卒業生は82.1%と特異な値を示している。この年度の卒業生は現在平均年齢34歳で、就業者のほとんどが既婚で子どもを保有していた。(23人中19人) そのうち、近年になって復職した者もあり(7人) 婚姻・育児に一段落し復職者が増えているとも考えられる。就業率を左右する要因が他にあるかどうか今後検討する必要がある。

### 2) 婚姻と就業状況との関係

婚姻と就業状況との関係を見ると、婚姻の有無は就業の有無と有意な関係があることがわかる。表4に示すように既婚者に就業していない者が多い傾向が見られる。

表4 婚姻と就業状況

就業状況	婚姻状況			計(人)
	未婚	既婚	他*	
就業していない	18	150	0	168
就業している	178	174	3	355
	196	324	3	523

\*他は離婚と記した者  
 $\chi^2=79.24$   
 $p<0.0001$

卒業年度別の現在の婚姻率と就業率とを示したものが図1である。婚姻率は昭和57年から53年の卒業年度にかけて急激に上昇している。また昭和55年前後に就業率の急激な低下が見られる。昭和55年の卒業生は、調査時点において卒後経過年数が4年であり、これは第1子出生時の平均卒後経過年数4.6年にさしかかっている。このことから、第1子の妊娠・出産の時点がひとつの離職の時期になっているのではないかと推測される。

### 3) 就業分野<sup>脚注1)</sup>

次に現在の就業分野を見ると、臨床が最も多く123人(34.6%)、次いで地域95人(26.8%)、看護教育92人(25.9%)、最も少ないのが行政7人(2.0%)であった。

日本私立看護大学協会会員校同窓生の卒後動向についての調査によると<sup>3)</sup>、現在就業している者は67.1%

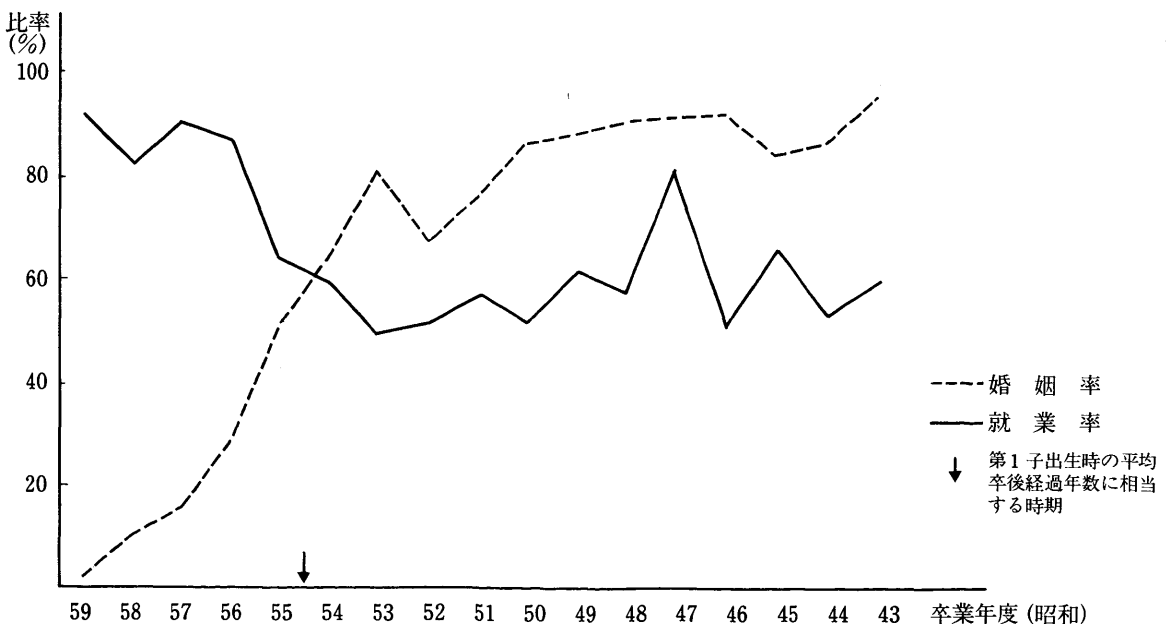


図1 卒業年度別婚姻率および就業率の推移

表5 婚姻と就業分野

婚姻状況	就業分野	看護教育	臨床	地域	行政	その他	計(人)
未婚		35	93	40	2	8	178
既婚		56	28	55	5	30	174
他*		1	2	0	0	0	3
計		92	123	95	7	38	355

\*他は離婚と記した者

$$\chi^2 = 58.139$$

$$p < 0.0001$$

(フルタイム)で、そのうち57.7%が臨床看護婦、11.6%が保健婦、約1割が看護教員であると報告されている。今回の本調査結果と比較すると、就業率についてはほぼ等しいが、本学においては、保健婦の免許をほぼ全卒業生が取得することから、保健婦として就業するものが、約30%近くを占めるのが特徴的である。また看護教育に従事する者の割合が2.5倍あることも本学のひとつの特色と考えられる。

卒業年度別にみると、就業する割合は卒後年数をあまり経てない年度では臨床に多いが、昭和49年以前の卒業生から20%を割るところが多くなる。一方教育は卒後経過年数1~2年では5%程度であるが、卒後3年を経た昭和57年からは徐々にその割合が増加してゆく。また地域は各卒業年度とも20~40%と比較的安定した割合を示していた。(図2)

就業分野と婚姻には有意な関係が認められた。表5に示すように未婚者は臨床に多く就業し、既婚者は看護教育・地域分野に多く就業する傾向にあることがわかる。

#### 4) 卒業時点における就業状況

全対象の卒業時点における就業状況についてみると、過去17年間の卒業時の就業率はほぼ90~100%の範

囲内にある。卒業後すぐに就業しない者は各年度に1~4人の範囲で認められる。

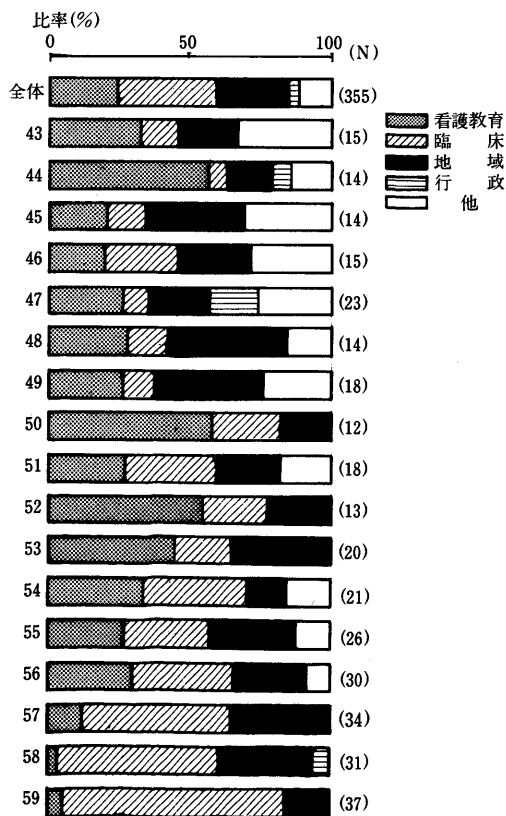
#### 5) 卒業時点における就業分野

次に就業分野についてみると、図3に示すように、卒業後すぐに教育に携わる者は昭和43年から47年まで各クラス2~4人(10%前後)いたが、その後昭和52年まではほとんどいなくなっている。昭和53年以降は再び少数であるが認められる。これは昭和53年以降の卒業生の中には編入学制度により看護短大卒業後何年か経過してから3年生に編入学してきた学生が含まれているため、卒業後すぐに教育に入るものと考えられる。

また、卒業時臨床に就業した者は昭和43年から46年ごろまでは50~60%であったが、昭和47年以降70~80%台のクラスが多い。

卒業後すぐに地域に就業する人は各クラス2~6人いたが、昭和47、48、50、52年には1人もいなかった。これには学生部が当時行っていた進路指導の方針が関与しているかもしれないと考えられる。昭和47年~54年頃までは、地域へ就職する希望を持つ者も、まずはじめに臨床に就業し、その後地域へ移るよう勧めるという方針であったが、最近では地方における就業の困難さや、公務員試験の合格率などから、卒業後すぐ

図2 卒業年度別就業分野の比率



脚注1 就業分野は調査時に以下のように分類した。

看護教育：看護系大学，大学(看護教員養成課程)，看護系短大，看護専門学校，看護高校，准看護学校，保健婦学校，助産婦学校，研修学校，その他

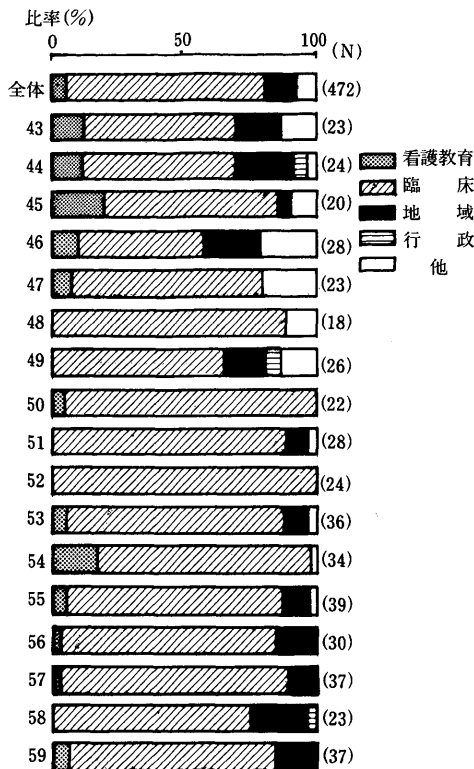
臨床：施設一病院，診療所(有床，無床) 専門一内科系，外科系，小児科系，産科系，精神科系，歯科，その他 部門一病棟，外来，手術室，管理，研究，院内教育，公衆衛生看護部，その他

地域：保健所，市町村，企業内保健婦，大学健康管理センター，その他

行政：国，地方公共団体，その他

その他：養護教諭，研究職，その他

図3 卒業時点での卒業年度別  
就業分野の比率



地域に入ることを勧める場合もあり、方針が変わってきている。

6) 将来の希望—復職の意志および就業分野

現在就業していない者168人(全体の32.1%)について復職の意志をみると、「やがては復職したい」が115人(68.5%)と最も多く、「できるだけ早く復職したい」が30人(17.8%),「復職の意志はまったくない」は23人(13.7%)であった。

復職の意志のある者の復職先の希望は、臨床34.1%, 地域31.2%, 看護教育20.3%であった。

7) 将来の希望—就業継続の意志および転職希望

現在就業している者355人について、就業継続の意志をみると、「ずっと続ける」が160人(42.8%)で最も多く、「やがては転職したい」117人(31.3%),「やがては家庭に入りたい」43人(11.5%),「進学を希望している」29人(7.8%)であった。(重複回答を含む)

進学を希望している積極的な将来計画を持つ者を含め、転職、退職の希望をもつ者が、50.6%を占めている。つまり2人に1人は現在の職場からの移動を考えていることがわかる。これとはほぼ同じような結果は、榊原らの<sup>4)</sup>看護短大卒業生の職場定着状況に関する調査でも報告されている。

3. 職業意識<sup>脚注2)</sup>

「仕事を持つ事はあなたにとってどのような意味がありますか。」という問いに対する全対象の反応は表6に示す通りである。仕事を持つ意味に関してA~Iまでの各項目について自分にとっての大切さの度合を5段階尺度で選択させた結果、「自分が成長する」という項目の平均得点が最も高く、次いで「新しい知識を得る」、「自律感を得る」、「仲間ができる。」という項目の順に平均得点が高かった(表6)。

表6 職業意識の得点状況

職業意識	得点平均値	最頻値
A 家族が望んでいる	2.41	3
B 職場の期待に答える	3.07	3
C 看護の発展に貢献する	2.98	3
D 新しい知識を得る	4.15	4
E 自分が成長する	4.50	5
F 自律感を得る	3.94	4
G 社会的地位を得る	2.65	3
H 経済的に楽になる	3.43	4
I 仲間ができる	3.63	4

得点尺度 3. いくらか関係がある

- 1. まったく関係がない
- 2. ほとんど関係がない
- 3. いくらか関係がある
- 4. 関係がある
- 5. 大いに関係がある

一方、A~Iまでの各項目と就業状況および背景との関係も調べたが、そのうち統計的に有意な関係があると認められたものは以下の通りである。就業している者は、していない者に比べて、「経済的に楽になる」、「自律感を得る」、「家族が望んでいる」の項目に高い得点を与える傾向が認められた(表7)。これらの項目は、就業の継続や動機に何らかの形で関与すると思われる。

表7 就業状況と職業意識

職業意識	就業状況	得点平均値	T値	P
家族が望んでいる	就業していない者	2.20	-2.85	0.005
	就業している者	2.51		
自律感を得る	就業していない者	3.76	-2.90	0.004
	就業している者	4.04		
経済的に楽になる	就業していない者	3.07	-5.36	0.001
	就業している者	3.60		

脚注2 ここでいう職業意識とは、仕事を持つ意味として自分にとって重要なことは何か、という観点に限り用いている。

また復職の意志と「自分が成長する」という項目の平均得点との間に有意な関係が認められた。(F=5.245 P<0.01)復職の希望をもつ者は、もたない者に比べて高い得点を与えていることがわかる。仕事をもつことと自己の成長という内発的動機との関係を示唆するものではないかと思われる。

修士号取得者は、学士号取得者に比べて、「看護の発展に貢献する」という項目に高い得点を与えている(T=-2.76 P<0.01)。学問の発展途上にある看護学に寄与しようと努力している卒業生の意志表示として注目に値すると思われる。

## V. 結論

聖路加看護大学卒業生524人に対し、大学卒業後現在までの動態を調査した結果、以下のことが明らかになった。

(1)昭和59年5月1日現在における就業率は67.7%である。

(2)婚姻状況と就業状況には関係があり、既婚者に就業していない者が多い。

第1子出生時にあたる平均卒後経過年数4.6年あたりから就業率の下降が著しい。

(3)現在の就業分野は、臨床34.6%、地域26.8%、看護教育25.9%である。

婚姻状況と就業分野との関係では、未婚者が臨床に、既婚者が看護教育・地域に多く就業する傾向が認められる。

(4)現在就業していない者のうち、復職の意志をもつものは、86.3%である。

(5)自分にとって仕事をもつことの意味の中で「自分が成長する」という項目の得点が一番高い。

就業している者は、していない者に比べて、「経済的に楽になる」、「自律感を得る」、「家族が望んでいる」

の項目に高い得点を与えている。

復職の意志がある者は、ない者に比べて、「自分が成長する」の項目に高い得点を与えている。

修士号取得者は、学士号取得者に比べて、「看護の発展に貢献する」の項目に高い得点を与えている。

## VI. おわりに

この報告は、大学卒業生の動態調査のまとめの一部である。今回は就業状況と職業に対する考え方に焦点をあて、量的な分析を行なった。過去17回の卒業生の現在までの軌跡の一部をたどり、看護・職業に対する前向きな姿勢を確認することができた。今後は、転職・退職の理由の分析を含め卒業時点から現在までの異動状況を把握し、卒業生1人1人を継断的視点から把握・分析してゆくこと、および大学への意見や記述項目の質的な分析を行なう必要がある。

最後に、本調査にあたり統計に関して御協力・御意見を下さった聖路加看護大学の高木廣文助教授ならびに調査に御協力下さった本学教員ならびに卒業生の皆様に心から感謝いたします。

(なお、本調査は聖路加看護大学満20周年記念事業の一環として行なわれたものであることを記します。)

- 1) 厚生省の指標、国民衛生の動向、昭和59年特集号、p. 50, p. 78.
- 2) 日本情報教育研究会編、昭和59年日本の白書、婦人白書、p. 47、清文社。
- 3) 日本私立看護大学協会調査委員会、日本私立看護大学協会会員校同窓生の卒後動向についての調査、看護教育、22(6)、1981、Pp. 347-9.
- 4) 榎原和枝他、愛知県看護短期大学卒業生の職場定着状況に関する調査、愛知県立看護短期大学雑誌、15号、昭和58年12月。

## LIFE AND WORK HISTORY OF THE GRADUATES OF ST. LUKE'S COLLEGE OF NURSING

Tokiko Yoshida et. al.

A survey study was done to investigate (1) the life and work history of the graduates of the 4 year program of St.Luke's College of Nursing, (2)their job related conceptions and (3)opinions, suggestions, and requests to the St.Luke's College of Nursing. Questionnaires were collected anonymously by mail, and 532(69.2%) were returned, of which 524(68.1%) were usable. Analysis was made on background information and conceptual questions.

Of the total sample of the graduates, 355(67.7%) work either full time or part time.

A significantly larger proportion of those who are single than those who are married are working.

The average number of years after graduation for the birth of the first child is 4.6, which seems to coincide with the time of the sudden decrease of working rate.

Those who are married have the tendency to work in the area of education and public health nursing rather than hospital settings ; whereas those who are single have the tendency to work in the hospital settings.

Of those who are not working currently, 86.3% indicate that they are willing to return to work.

Among items of job related concetions, "personal growth", "autonomy" and "acquiring new knowledge" earned the highest scores.

Higher scores are assigned by those who are currently working than those who are not working regarding the items, "autonomy", "financial need" and "family ideology".

Those who indicate that they are willing to return to work give higher scores to the item of "personal growth" than those who indicate otherwise.

Graduates with master's degree assign higher scores concerning the item of "contribution for the development of the profession" compared to those who are without master's degree.



## 紀要第10号 訂正表

### 〔誤〕

- (1頁上) 看護婦のセントジョン夫人が  
(1頁左) Mr. J. D. Lockfeller  
(3頁右) R. M. ピアス博士  
(6頁左) ウインセント氏かざピアード教授への  
(6頁左) エングリー氏からラッセル博士せの  
(7頁右) オイスラー博士  
(9頁、10頁) トスラー博士  
(16頁右) 継断的視点  
(18頁左) 同数  
(28頁左、表VII a) 8、百絡、調整  
(31頁右) むいては  
(33頁左) 要案  
(35頁左) 約言すれば  
(35頁左) 病院統婦長  
(51頁右図I) 奇生  
(52頁左表I) (左) 奇生  
(右) 奇生  
(53頁左) 抱いているか、<sup>23)</sup>  
(裏表紙) OKIGINAL

### 〔正〕

- 看護婦のセントジョン夫人が  
Mr. J. D. Rockfeller  
R. M. ピアス博士  
ウインセント氏からピアード教授への  
エングリー氏からラッセル博士への  
トイスラー博士  
トイスラー博士  
縦断的視点  
同率  
8、連絡、調整  
ついては  
要因  
換言すれば  
病院総婦長  
寄生  
寄生  
疎外  
抱いているか、<sup>23)</sup>  
ORIGINAL